

栗田三郎前理事長の手記 III. 痴呆性老人に対する介護（1986年）

介護には、あらかじめ共通した大切なことがある。これは介護が成功するか失敗するかの鍵になる。

第1に、痴呆性老人を私たちが受け止めることが出来るか出来ないかである。
変なことを言ったりしたりするので馬鹿にしたり取り合わなかったり、無視したりし続けるとその老人が生きていける場がなくなり、不安や孤独になってボケていく。

第2に、その老人となじみになれるかというところである。
老人は誰かに頼っていかないと生きていけないので、言うことすることに間違いがあっても、そこには老人の心があるのでなじみになってそれを分かってやり、それに沿って老人の心や仕方のペースに合わせて援助していくことが必要である。
よく自分の心知ってくれるなじみの仲間がいると頼りにして楽しく安心して暮らしていく。

第3に、その老人の良い点を認めて、良い付き合いが出来るかどうかというところが重要である。
痴呆性老人は間違いも多く、困ることもするので、そういう悪い点だけ着目していくと、その老人は限りなく困り者とか厄介者と思えてきたりして一緒に住めなくなる。
しかし、それでも必ずある良い点を見つけて付き合いしていくと良いものを次々に現してくる。

この3つを一口に言うとその老人を好きになれるかどうかに関護の成否にかかっている。